

自分では実を結べない人間のために

ヨハネによる福音書15:1～8 / 李正雨牧師

哲学や神学のような人文科学にあって、常に話題になっている言葉があります。元々、人間は善の存在なのか、悪の存在なのか。中国の哲学者である孟子は、人間は元々善の存在だと主張しました。しかし、次の世代の哲学者である荀子は、孟子の主張に反論しました。荀子は、人の本性を正しくて秩序あるもの、磨かれたものだと思ったら、君子や聖君になるために努力する必要はないのだと説きました。だからといって、人間が生まれながら悪を持っているというわけではありません。人間は生まれてから、悪に傾く傾向があるということが荀子の主張です。このように見ると、荀子の主張は聖書と似ているようですね。それでは、聖書は、人間についてどう語っているのでしょうか。創世記によると、人間は善の存在でした。しかし、ヘビの誘惑によって、罪が人間の中に入り、罪に支配された人間は、もはや善の存在にはなれませんでした。その罪によって人間は、以前のように、神の園で暮らすことができなくなり、退けられた人間には、死というものが与えられました。そして、神の園の外で、人間はますます悪くなり始めました。創世記6章5節の言葉です。「主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、」神と離れた人間は、悪に染まり始め、悪いことばかりを計画する存在になったというのが聖書の人間論です。

しかし、人間の中には、いつも悪だけが存在しているわけではありませんでした。善を行う人もいました。このような人々の特徴は、神さまと共におり、神さまに従う人々でした。多くの人々が悪に染まり、世の中には悪が満ちていましたが、善を行っていた人がいたということです。しかも、善を行った人々も、悪を持っていました。悪を持ったまま善を行う人々、その人々は、神さまの人々でした。そして時間が経ち、神さまの人々には律法というものが与えられました。私の考えでは、律法がユダヤ人の社会をより秩序ある世界、豊かな世界にしてくれたと思います。なぜなら、律法は彼らが悪を行うことを防いで、善を行うことができるように導いたからです。神さまから頂いた律法によって、自分の社会にバランスが取られると、彼らは律法をもっと愛しました。

詩篇1編の著者はこう言います。「いかに幸いにことか。神に逆らう者の計らいに従って歩まず、罪ある者の道にとどまらず、傲慢な者と共に座らず、主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人。」ここでの教えは、律法を意味しています。律法を愛して、口ずさむ人には幸いがあるということです。彼らは罪ある者と傲慢な者にならないと著者は語ります。そして、このような人々は、詩篇1篇3節の言葉のようになるのだと言います。詩篇1篇3節の言葉です。「その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び、葉もしおれることがない。」律法を愛して口ずさむ者は、ほとりに植えられた木のように、ときが巡り来れば実を結ぶと著者は唱えています。

ところが、今日の福音書でのイエスさまは、特別な話をなさいます。イエスさまは、実を結ぶために、「律法をちゃんと守りなさい」とは言われません。実を結ぶためには、ご自分とつながっていなさいと言われます。今日の福音書4節の御言葉です。「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながってなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながってなければ、実を結ぶことができない。」

実を結ぶために、すなわち、神の人として信仰を守り、善を行うためには、イエスさまとつながってなければならぬということです。そうでなければ、次の5節の言葉通りに自分では何もできません。「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」

イエスさまは、人が実を結ぶためには、善を行うためには、律法を守るのではなく、ご自分につながっていただかなければならないと言われます。この言葉が何を意味しているのでしょうか。律法は守らなくてもいいというのではないでしょう。イエスさまのこの言葉は、律法を守ることが、真の善を行うことではないというのだと思います。律法がなかったとき、律法が与えられる前の聖書の人物たちも善を行いました。彼らには何のルールもなく、彼らも悪を持っていました。それにもかかわらず、彼らは神さまと共にいたという理由で、善を行うことができました。もちろん律法が与えられた後には、より善を行することが容易になったのは事実です。しかし、その善は、法律によって導かれた善に過ぎませんでした。心から神さまを愛して行った善ではなく、法律が善を行わせたというのです。さらに、イエスの時代の人々は、この法律を守るだけでも善を行なったと勘違いしていました。裏では善を行っていないのに、表では善を行うふりをしていたということです。

イエスさまはこのような状況をよくご存知でした。だから、ご自分の弟子たちに、ご自分につながっていなさいと言われました。そうでなければ、弟子たちは信仰を守ること、善を行なうこともできなかつたでしょう。いや、表では善を行うふりをしながら、自分を欺いていたかもしれません。「私なら大丈夫だろう」と、自ら満足していたかもしれません。しかし、これらの弟子たちは、神さまの栄光になることができません。自分では実を結んでいると思っても、葉のほかは何もない木になるでしょう。そして最終的には、農夫によって取り除かれて、火に投げ入れられるのです。6節の言葉です。「わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。そして、集められ、火に投げ入れられて焼かれてしまう。」

多くの人々が自分自身をすてきな人、偉い人で見せたいがります。誰でも同じでしょう。政治家でも、音楽家でも、医師でも、会社員でも、教師でも、牧師でも... 誰でも自分を良い人、善を行なう人に見せたいがりますね。だから人の目の前では、法律をよく守り、模範を見せようとしています。しかし、これが善を行うことではありません。これが神さまの栄光になることでもありません。表に見えることが本物であるわけではないからです。イエスさまとつながっていただければ、イエスさまによって守られていただければ、私たちは真の善を行うことも、私たちの善が神の栄光になることもできません。自分の力では実を結ぶことができないのです。

ルターの話の中で奴隷意志という言葉があります。この言葉は、神学的であるエラスムスとの議論の中から出てきた言葉です。エラスムスはルターの宗教改革の問題を指摘して、教会の腐敗を認めているが、改革は、教会の中で行われるべきだと主張しました。そしてルターが主張した人間の全的な墮落に対して反論します。人間の意志で善を行ない、悪の誘惑を拒否することができるということです。しかし、ルターは、人間は善を行うことができる能力がなく、人間の意志では罪だけを犯すのだと言います。人が善を行うように見えても、内面には罪が隠されているということです。もちろん善を行うことにおいて、人間の意志が全く要らないということではないと思います。でも、私は善を行おうとする意志も、神さまから来たものだと思います。過去から現在に至るまで、人間は宗教的に、哲学的に、社会的に善を行い、追求してきたと思います。そして、このようなことによって、私たちの世界は、過去より発達し、変化して来ました。しかし、このような善には限界がありました。時代の変化に応じて善が悪用されたり、善が悪になったりすることもありました。結局、人間は自ら真の善を、すなわち、実を結ぶことができませんでした。

今日の福音書は、このことを語っています。御子とつながっていただければ、何もできないということです。逆に御子とつながっているなら、何でもできるでしょう。イエスさまとつながっている私たちは、善を行うことも、善を通して実を結ぶことができます。そして、このような実を通して、神さまは栄光をお受けになるでしょう。私たちの信仰を通して神さまが栄光をお受けになるということです。だから皆さん、イエスさまとつながってください。私たちの信仰とイエスさまの御名によって行われるすべてのことは、神さまの栄光になるでしょう。飯能ルーテル教会において行わ

れているすべてのことが、神さまの栄光になりますように、主の御名によって祈ります。アーメン